

NEWSLETTER No. 28

ララ物資から始まったCWSの歴史

第二次世界大戦後、日本では飢えや伝染病が蔓延し、国民の生活は困窮していました。その日をどう生きるかについて皆が悩み、戦争孤児も非常に多い状況でした。その現状に対して何かしたいと北米のクリスチャンが集まり組織されたのがララ物資でした。ララとは「**L**icensed **A**gencies **R**elief for **A**sia」の頭文字を取って「LARA」と書きます。450トンもの食料や医薬品を積んだ最初の船が横浜港に到着したのが1946年11月30日、チャーチワールドサービス（CWS）の歴史はまさにこのララ物資から始まったのです。

ララ物資は1952年まで合計16,200トンもの支援物資（当時の金額に換算して400億円程と言われていきます）を送り、日本人口の約15%、1,400万人が裨益したと言われていいます。学校給食でパンが出るのも、当時の支援物資の小麦粉を使った給食を提供し始めた事にルーツがあると言われていいます。そのララ物資には5つの精神がありました。「公平性」、「自主性」、「尊厳の尊重」、「官民協働」、そして「受けるより与える方が幸い」というものです。私たちが大切にしている人道支援原則や現地主義（ローカライゼーション）といった考えと通ずるものが多く、70年以上前から人道支援の原則は実践されていたと改めて歴史を感じさせられます。

ララ物資に関わった当時の方々には、一つ大きな願いがありました。それは、戦後日本人が復興した後には、日本が諸外国と協力し、持てるものを分かち合う国民になって欲しいというものです。まさにその願い通り日本は世界で有数のODA（政府開発援助）国となり、日本の支援に感謝する国々も多く存在します。しかし、現在戦後最悪の人道危機と言われている状況で、難民・避難民の方々も増え続ける一方です。世界

では今この瞬間に30以上の紛争が起きており、気候変動の影響によって気象災害も多発しています。経済成長の裏に格差の増大など、様々な歪も生まれています。

「受けるより与える方が幸い」というのは人間としての幸福感をまさに表しているものだと思います。マズローの欲求5段階説においても、段階が上がれば上がるほど周りの人間との関わりが重要になってきます。人間として最大の喜びは、人の為に何かできる時に訪れるものではないでしょうか。そして「自己」を超えた所に真の意味で人類の繁栄があるのでしょうか。

昨今、社会が内向的に進んでいるように感じます。将来の危機感からとりあえず自分の周りを重視せざるを得ない状況もあるでしょう。しかし、人間としての幸せの本質を私達が見つめる時、それは人・社会に貢献することが重要であり、私達が日々の生活の中でも実践できる事が多々あると感じます。戦後の苦しい時に多くの人々が人生をかけて私達の国を支援してくれたように、私達も他者と痛みを分かち合いながら歩んでいきたいと切に思います。皆様の平安を祈念して
(文：事務局長 小美野 剛)

ララ物資に関する詳しい説明はこちらをご覧ください：
<https://www.cwsjapan.org/story/lara/>



援助物資を受け取る子どもたち

10月30日～11月1日の間に行われた、アジア防災センター20周年記念会議に出席しました。アジア防災センター（通称ADRC）は神戸の「人と防災未来センター」内にあり、日本の科学技術を結集し、アジア地域における防災力を高める事業を展開されています。現在31カ国が加盟しており、今年加盟された最新のメンバーはトルコです。それぞれの国の防災機関（日本の内閣府のような政府機関）が総会メンバーとして位置づけられており、CWS Japanが理事を務めるADRRN（Asian Disaster Reduction and Response Network）も実はADRCのご尽力によって2002年に設立されました。当時はまだ兵庫行動枠組の内容が議論され始めた頃で、アジアにおける多様な市民社会の声を反映させる為にと、ADRCや国連人道問題調整事務所（OCHA）が中心となってアジアの市民社会リーダーを集め、それがADRRNの設立へと繋がったそうです。

ADRCの主要な活動としては、各災害に関する情報共有、特に国際的に認知されているGLIDE (Global unique disaster identifier)という規格を展開していて、同じ災害でも呼び方が違う事でデータ間の相関性が無い現状を変えようとされています。また、各国から述べ100人以上研究生を受け入れ、日本の最先端の防災技術を継承すると共に、加盟国それぞれの防災力を今後高めていく人材育成をされています。

各国の防災力向上を考える際に、コミュニティ自身の知識や活動を更に盛り上げる事も重要と言われており、今回CWS Japan/ADRRNが招待されたのもその役割を期待されての事です。NGOの強みとは、現場で活動を展開している事、様々な政策をコミュニティレベルまで実施していく原動力と認知されています。CWS JapanではそのNGOの強みをアジアの仲間たちと最大限発揮しつつ、防災技術、研究成果、防災政策が一人一人に裨益するよう、今後もパートナーシップを重視した活動を展開していきます。

（文：事務局長 小美野 剛）

CWSが加盟するACT Alliance（アクト・アライアンス）は、スイス（ジュネーブ）に本部を置くプロテスタント、カトリック、ギリシャ正教等の教会・団体が加盟するエキュメニカル（超教派）な国際援助連盟です。現在、125カ国から約150もの人道・開発支援活動を行う教会・団体が加盟しています。その4年に1度の総会がこの10月末5日間にわたり、スウェーデン国教会のホストにより、ウプサラ市において開催されました。日本からは、NCCJ（日本キリスト教協議会）とCWS Japanの2団体が加盟しており、この度初めて総会にNCCJの金総幹事と共に参加しました。300名あまりの参加者が集う全体会の他、アジア太平洋、ヨーロッパ、北米、南米、中東、アフリカと地域毎の分科会において、様々な議案についての議論、意見を集約させるという日々を送りました。通常総会で行われるような審議事項以外に最も時間が費やされたのが、公式声明文承認で、アジア太平洋地域における気候変動からシリアやブラジルにおける民主主義などと個別国の問題にいたるまで計14もの声明文を3日間かけて承認・決議するというプロセスの中で各団体・教会の保守・リベラルの差が現れたのが印象的でした。総会承認された声明文 URL：<https://actalliance.org/act-assembly/assembly/public-statements/>

また、今回可決された重要議案の1つに、各加盟団体が国レベルでまとめ、National Forumとしての協調・協働を促進する動きになったことです。これにより、今後、CWSとNCCの連携強化を名実ともに進めていくことになりました。

（文：プログラムマネージャー 牧 由希子）



総会全体会の様子